

## 乳児期の食事場面における子どもの心地よさを支えるための要因に関する研究 —子どもと保育者の関係性構築のプロセスに着目して—

|       |        |              |
|-------|--------|--------------|
| 研究代表者 | 淀川 裕美  | (千葉大学准教授)    |
| 共同研究者 | 酒井 治子  | (東京家政学院大学教授) |
|       | 林 薫    | (白梅学園大学教授)   |
|       | 志賀口 大輔 | (なごみこども園園長)  |
|       | 渡邊 高幸  | (松が丘保育園園長)   |
|       | 會退 友美  | (東京家政学院大学助教) |
|       | 池谷真梨子  | (和洋女子大学助教)   |
|       | 伊藤 優   | (島根大学助教)     |

### 研究の概要

本研究では、2019年度の保育科学研究の知見をふまえ、子どもと保育士が入園後に関係性を築きながら、子ども自身も発達していく中で、保育士がその子の特徴をどのように捉え、その子の食事場面での心地よさを支えるためにどのように援助や環境構成をしていったか、変容の具体を描出した。

認定こども園A園と保育所B園の0歳児クラス担当保育士各1名に協力頂き、2021年5月から9月に、アンケート調査及びインタビュー調査を実施した。アンケートAでは、「0歳児クラスの食事に関する子どもの育ちで大切にしていること」について5月と9月に10件法で尋ねた。アンケートBでは、「食事時間における担当児に対する食事援助の難しさ」「食事時間における担当児の様子」「食事時間における担当児の理解」について、5月から9月の毎月、10件法で尋ねた。アンケートCでは、対象児の食に関するエピソード（各月の前半と後半にそれぞれ1つ以上）について、記録した日付と保育と調理の連携内容、前月からの改善や進行具合、課題、担当児の反応や変化等を記載してもらった。また、インタビュー調査では「担当児の食事」「担当児の食事に関するクラスの先生方との情報共有」「担当児の食事の環境設定とかかわり」「今後の0歳児クラスの食事への思い」について、5月から9月の毎月尋ねた。A園ののぞみ先生と担当児あけみ、B園のみどり先生と担当児けんじの2組について、園児の離乳食の変遷、園児の食事の様子と、担当保育士の支援の変容をインタビュー結果を中心に分析した。

2つの事例で共通していたのは、保育士は子どもが楽しく食事をする、自ら食べようとするを大切にしながら、その時々の子どもの思いや姿を受け止め、その子によってより心地よい食事環境や食事のかかわりを考え、対応していたことである。子どもの自主性の表れやペースは一人ひとり異なるものであり、食事場面での「子どもの心地よさ」を支える／脅かす要因も違うことが、本研究の事例からも示唆された。

また、それぞれ異なる子どもの食事の思いを受け止めながら、どのようにしてその子にとっての心地よい食事を支えられるかを試行錯誤していることが、2組の事例から描出された。特に、0歳児クラスの入園当初は、一人ひとりの子どもとの出会いがあり、保育所での暮らし全体を通して信頼関係を築きながら、食事の営みをその子とともにつくっていく時期である。どちらの事例でも、子どもの発達に伴い変化する食事の様子を受け止めながら、その子の思いを必ずしも十分に捉えきれない中で、想像することで補い、子どもの思いがけない反応に戸惑い、自分の対応を振り返り、また試し、反応を見て、子どもの成長変化に喜びや手応えを感じるということを繰り返していた。その子の食事の「心地よさ」を支える諸要因は、そうしたプロセスの中で考えられ、試され、見出されていくということが示された。

キーワード：食事場面、心地よさ、乳児、関係性、プロセス

## I. はじめに

本研究は「子どもの心地よさ」と、そのための環境として、子どもと保育者との関係性に焦点を当てた研究である。子どもにとって毎日毎日の食べる場が心地よい場であって欲しい、そうした願いからである。2020年からほぼ2年が経過する中、新型コロナウイルスの感染が拡大し続け、「食べることは生きること」「生きることは食べること」、そのいずれもが今、大きく揺らいでいる。それにより、飲食の場での人と人との接触の場を減らすことがフォーカスされ、共食への不安感が大きくなるなど、今まで考えもつかなかったことである。次の未来を担う子どもに何を継承するのか、保育を通して子どもの食の何を保障していくのか、探索の真っ只中にある。

「食べるという行為」は適度な空腹感を基盤に、心地よい食事の量や質、そして、その場を共有する子どもと保育者の応答的なかわりによって、満腹感と満足感の双方が伴っていくものであろう。「心地よい」という言葉が「子どもの食」をめぐる用いられたのは、平成16年に厚生労働省雇用均等・児童家庭局から通知された「楽しく食べる子どもに～食育に関する指針～」である。6か月未満児から2歳児までの低年齢児において、「お腹がすき、食事を喜んで食べ、心地よい生活を味わう」ことが「ねらい」の一つになっている。食育のために子どもの発達過程に応じた配慮事項が示されているが、「心地よさ」に焦点を当て、そのための援助や環境構成を詳細に検討したエビデンスが多いわけではない。この観点によって探求することが、食育指針において食育の目標である「現在を最もよく生き、かつ、生涯にわたって健康で質の高い生活を送る基本」としての「食を営む力」の育成に向け、その基礎を培うために不可欠である。

## II. 研究の背景と目的

我々の研究チームでは、2019年度に、0歳児クラスの食事場面における保育士の援助と環境構成に関する研究を行なった（淀川他，2019）。0歳児クラスの食事援助における「子どもの心地よさ」に着目し、アンケートの記述内容やグループインタビューでの語りの内容をカテゴリー化し、量的に検討することで具体的な知見を得ることができた。しかし、実際の食事場面では、目の前の子どもと自分という個別具体的関係性の中で、試行錯誤しながら関係性を築き、食事の援助を考えるプロセスがある。

そこで今年度の研究では、2019年度の研究結果をふまえ、子どもと保育士が入園後に関係性を築きながら、子ども自身も発達していく中で、保育士がその子の特徴をどのように捉え、その子の食事場面での心地よさを支えるためにどのように援助や環境構成をしていったか、変容の具体を描出する。それにより、0歳児クラスの食事場面での子どもの心地よさを支える保育士の援助や環境構成に関して、より実践に即した具体的な示唆を得ることを目的とする。

## III. 方法

### 1. 調査協力者

認定こども園1園（A園）と保育所1園（B園）の0歳児クラス担当保育士各1名。保育士の属性は、表1の通り。また、調理カレンダーの記入については各園の調理担当者に依頼した。なお、本稿に登場する固有名詞はいずれも仮名である。

表1 調査協力者の属性

|         | のぞみ先生 | みどり先生 |
|---------|-------|-------|
| 勤務園     | A園    | B園    |
| 年齢      | 20歳代  | 50歳代  |
| 性別      | 女性    | 女性    |
| 保育経験年数  | 3年目   | 15年目  |
| 0歳児担当回数 | 1回目   | 7回目   |

### 2. 調査協力園の概要

#### 1) 認定こども園A園

A園は平成10年代後半に開園し、平成20年代後半にこども園に移行した。社会福祉法人としては昭和20年代後半に開設しており、法人としての歴史は長い。

園の玄関から、最初に通される相談室、保育室等に至るまで、穏やかで落ち着きがある。感性豊かで文化的な「心地よさ」が、一貫したメッセージとして伝わる構造となっている。またA園は、これまでも教育・研究機関と連携し、保育・教育の実践研究、保育の質の向上に取り組み、同時に地域の子育て支援、活性化に成果を上げている。

なお、定員は1号認定15名、2、3号認定120名、うち0歳児は16名である。

A園開園前は、同法人内のC保育園において0歳児クラスの離乳食は一斉に行われていた。現園長がC保育園の保育を観察する中で、多様な生活時間の

子どもが混在しているにも関わらず、一斉に同じ時間に食事や睡眠が行われることに疑問を感じ、子どもの個別性に対応している保育についての学びを開始する。A園の開園時に、子ども一人ひとりのリズムに寄り添った保育を提案し、保育者と共に複数園の見学や園内研修を行う。当初、現場の保育者から反対する声も上がるが、子どもが落ち着いて、安心して過ごす様子から、段々と個別に対応した保育が浸透し、定着していたという。

## 2) 保育所B園

B園は昭和40年代後半に開園し、2000年代前半に園舎を立て替えた。入口横の園庭は子どもが多様な遊びを自由に展開できる構造となっており、開放的な空間と、子どもが落ち着いて生活できる工夫が随所に見られる。

保育の方針は主会議で決定しており、主会議は、園長、主任、副主任、クラスリーダー6名、調理リーダーが入り、月1回行っている。主会議の前の週に、園長、主任、副主任、調理リーダーで主会議の打ち合わせをしている。

なお、定員は120名、うち0歳児は10名である。

B園は2016年以降、一斉保育から担当制保育へと移行した。担当制保育に移行するきっかけとなったのは、B園園長が他園の園長から個別に対応した保育を紹介され、その園を見学したことにある。B園の主任は、その園から紹介された子どもの個別性に対応した保育を複数園見学し、食事をしている子どもの様子が落ち着いて静かであることに気づく。その後A園を見学し、自園の職員にも見せたいという思いから、2週にわたり土曜日に調理員を含めた全職員がその園を見学した。また、その園の園長から園内研修を受けた。B園園長は自園でも子ども一人ひとりを大切にする保育、個別に対応した食事（離乳食）に取り組みたいと考えたが、当時、給食の職員からは個別の対応は難しい、手立てがわからないという話も出ていた。保育士からの反対はなかった。現在は、職員も入れ替わり、子どもの個別性に対応する保育の体制が整ってきている。個別対応になってからマニュアルを作り、どのように援助するのか等、主会議で毎年見直しを行っている。

## 3. 調査方法

### 1) アンケート調査

アンケート調査は、A、B、Cの3種類を実施した。

|        | 実施時期      | 内容                                                                     |
|--------|-----------|------------------------------------------------------------------------|
| アンケートA | 5月と9月     | 保育士が食事で大切にしていることなど、短期間の変化が少ないと予想される内容                                  |
| アンケートB | 5月から9月の各月 | 担当保育士と担当児2～3名それぞれの関係性や担当児の食に関する変化と、それぞれの担当児に関する食事の内容や様子の変化のエピソード（自由記述） |
| アンケートC | 5月から9月の各月 | 食形態に関する記述と対象児のエピソード                                                    |

#### 1-1) アンケートA

①0歳児クラスの食事に関する子どもの育ちで大切にしていること

以下11の項目について「まったくあてはまらない」～「とてもあてはまる」の10段階でたずねた。

意欲的に食べること、食への興味や関心を持つこと、食のマナーを身につけること、食べ物を大切に扱う態度を身につけること、いろいろな食材や味付けに慣れていくこと、いろいろな味や触感にふれ、楽しむこと、好き嫌いをなく、なんでも食べられること、月齢や年齢に応じた食事量を食べられるようになること、自分で考えて、食事について自分の思いを表出できること、食事の歓びを保育士や友だちと分かち合うこと、先生や友達とコミュニケーションをとり楽しく食事すること

#### 1-2) アンケートB

①食事時間における担当児に対する食事援助の難しさ

以下15項目について「まったく難しくない」～「とても難しい」の10段階で尋ねた。

食が細い、食べ過ぎる、好き嫌いが多い（偏食）、自分で食べようとしない、すぐに気が散ってしまう、食べることに興味がない、食べるのに時間がかかる、食具への関心を示さない、咀嚼が弱い、離乳食への移行が遅い、離乳食の段階が進んでいない、眠気に勝てない、機嫌が悪くなる、気分のムラがある、食べる姿勢が悪い、食物アレルギー



## ②食事時間における担当児の様子

以下9項目について「まったく見られない」～「いつも見られる」の10段階で尋ねた。

食事時間になったら「担当のお子さん」が自分から席に向かう様子、「担当のお子さん」自身で食事を食べようとする様子、スプーンで食べさせてもらうことから自ら食べようとする様子、「担当のお子さん」が自分の想いを保育士に伝える様子、食事が待ち遠しい様子や楽しみにしている様子、「担当のお子さん」が自分で食べようとし、自分で食べることに自信や達成感をもっている様子、「担当のお子さん」が安心して、園で食べるものや飲むものを受け入れたり、拒否したりしている様子、食事時間中、安心して食べている様子、食事時間中、保育士と目を合わせながら食べる様子、食事時間中、保育士と微笑み合う様子

## ③食事時間における担当児の理解

以下6項目について「まったくあてはまらない」～「いつもあてはまる」の10段階で尋ねた。

好きな授乳の仕方、食べ方がわかる、好きな食材・調理法が分かる、園での授乳や食事の癖や特徴がわかる、空腹を感じている様子がわかる、食事の終わりの意思がわかる、食事時間が「担当のお子さん」の生活の中で心地よいタイミングで取られている、食事時間中、「担当のお子さん」との信頼関係を作ることができている

### 1-3) アンケートC

食事記録に関する内容として、担当保育士に対象児の食に関するエピソードを各月の前半に1つ以上、後半に1つ以上記録してもらった。記録した日付と、保育と調理の連携内容、前月からの改善や進捗具合、課題、担当児の反応や変化等を記載してもらった。

### 2) インタビュー調査

5月、6月、9月の3回、担当保育士に、それぞれ同じ研究者が毎回30分程度のインタビューを実施した。5月、9月に①②③④について、6月は①～③についてたずねた。

①担当児の食事について、②担当児の食事に関するクラスの先生方との情報共有について、③担当児の食事の環境設定とかかわりについて、④今後の0歳児クラスの食事への思い

### 3) 調理カレンダー

調理担当者に、提供する食事に変化があった場合、調理カレンダーの日付にその内容を記述してもらった。また、B園では、園で独自に作成している「離乳食チェック表」があり、その内容も適宜分析に使用した。離乳食チェック表は、園児の食事で気づいたことについて保育士が毎日記載し、それを調理員に渡して保育士と調理員が園児の食についての情報を共有するためのものである。

## 4. 分析対象者の選定

### 1) 保育士の選定

担当保育士2名を選定するにあたり、4月時点の各園の担任保育士が0歳児クラスの食事では何を大切にしているかを参照した。両者とも「いろいろな味や触感にふれ、楽しむこと」や「先生や友達とコミュニケーションをとり楽しく食事すること」について「8」～「10」と高い数値を選択しており、0歳児クラスの食事において味覚の発達や食材の触感、食事場面で先生や友達と楽しく食事することを大切にしていた。

一方、「食のマナーを身につけること」「食べ物を大切に扱う態度を身につけること」「好き嫌いなく、なんでも食べられること」「月齢や年齢に応じた食事量を食べられるようになること」の項目は、のぞみ先生は「3」または「4」を、みどり先生は「7」～「10」を選択していた。この点で両者は0歳児クラスにおける食事観が異なり、かつ食事援助の難しさを感じる園児を担当していたことから、この2名を分析対象とした。

### 2) 園児の選定

のぞみ先生、みどり先生はそれぞれ3名の園児を担当していた。そのうち、1名ずつとの食事場면을分析対象とした。

のぞみ先生の担当児は、食事量が極端に少ない園児1名、食べることが大好きで他児より食事量が多かった園児1名、食べムラがあり、日によって食事内容や量が異なる園児1名（あけみ）であった。3名のうち、のぞみ先生が食事量や食事に対する意欲、食事中の動き等多岐にわたって不安を感じていたあけみを選定した。

みどり先生の担当児は、体調不良による食欲不振以外に食事援助の難しさが特に語られなかった園児1名、入園から1ヶ月ほど食事の場所（保育室外）を嫌がり保育室内で食事をしていたが、食事そのものは楽しそうにしていた園児1名、入園から1ヶ月

半ほど椅子に座りたがらず、食材にも怖くて手を出せず、自ら食べようとする姿が見られるまで時間がかかった園児1名（けんじ）であった。3名のうち、みどり先生が食べることへの意欲に関する難しさを長期間語っていたけんじを選定した。

## 5. 分析方法

### 1) 園児の離乳食の変遷

あけみとけんじそれぞれの離乳食の変遷については、離乳食カレンダーから離乳食の区分、食事記録に関するアンケートCから食形態に関する記述と対象児のエピソードを分類し抽出した。

### 2) 園児の食事の様子と、園児と担任保育士の食事での関係性

あけみとけんじの食事の様子の変容については、のぞみ先生とみどり先生へのインタビュー内容を参考にして、それぞれ研究者各2名が対象児の食事の特徴を審議した。その上で、アンケートBの「食事時間における担当児の様子」で尋ねた10項目の中から、あけみとけんじの特徴をよく表していると考えた4～5項目を抽出し、グラフ化した。

園児と担任保育士の食事での関係性についても、同様の方法で、アンケートBの「食事時間における担当児の理解」で尋ねた7項目の中から、それぞれ

の関係性をよく表していると考えた4～5項目を抽出し、グラフ化した。

### 3) 担任保育士が語る園児の食事の様子と保育士の支援の変遷

のぞみ先生、みどり先生へのインタビューデータ、調理カレンダー、質問紙調査の自由記述等をもとに、先述の対象児の食事の特徴を表すキーワードを審議し、キーワード毎に子どもの食事の様子と保育者の支援の変容について具体的に検討した。

## 6. 倫理的配慮

本調査では、調査協力者に対して、調査開始前に調査の目的や内容等について文書で説明した。調査に協力できない場合は中断する場合にも不利益が生じることはないことを十分に説明した上で、同意書を提出して頂いた。なお、本調査は東京大学倫理審査専門委員会にて承諾を得た（承諾番号21-261）。

## IV. 結果と考察

### 1. あけみと担当保育士ののぞみ先生の事例

#### 1) あけみの離乳食の変容

表2に示す通り、4月当初は、後期食からの開始であったため、食後にミルクを足していた（下線

表2 あけみの離乳食の変容

|                       | 4月                                                                                                                              | 5月                                                                              | 6月                                                                               | 7月                                                                                 | 8月                                                                                           |
|-----------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------|
| 食<br>形<br>態           | 4/1 後期食                                                                                                                         | 記載なし                                                                            | 6/24 普通食                                                                         | 記載なし                                                                               | 記載なし                                                                                         |
|                       | 4/30 完了食                                                                                                                        |                                                                                 |                                                                                  |                                                                                    |                                                                                              |
| エ<br>ピ<br>ソ<br>ー<br>ド | 4/1 本児は前年度からいたが、離乳食が進んでおらず、後期食を食べている。そのため、ミルクを80cc足している。 <sup>①</sup>                                                           | 5/12 汁物が好きなので、指をさしてほしいことを伝える <sup>②</sup> ようになった。                               | 6/1 軟飯を食べていたが、ごはんを手づかみで食べようとする姿が見られたので、手づかみたべがしやすいよう軟飯からごはんに変更した。 <sup>⑦</sup>   | 7/16 魚が好きでよく食べる本児だが、今日のあじのマリネは食べ慣れていないのか、1口食べると口かざらだし、その後は食べようとしなかった。 <sup>⑧</sup> | 8/16 副菜を食べなくなり、見た目（緑色）で判断しているのか、スプーンを近づけても口を開けようとしなかった。 <sup>⑨</sup>                         |
|                       | 4/16 体調不良で1週間程休んでいたこともあってか、食事のすすみが悪く、ほとんど食べられなかった。                                                                              | 5/24 軟飯を嫌がるようになり、軟飯だけスプーンにのせると口に入れようとしなくなった <sup>⑥</sup> 。おかずなどを混ぜると少しだが食べてくれる。 | 6/24 移行食もたくさん食べられるようになったり、よく噛んで食べる姿が増えたので、家庭と相談し、移行食から普通食を食べるようにした。 <sup>⑤</sup> | 7/26 食事中に眠たくなってしまいうことが増えたので、食事時間を11:00から10:40に変更した。 <sup>⑩</sup>                   | 8/25 本児の中、食べたいものやペースが決まっているのか、指をさして、食べたい物を伝えたり、介助スプーンと一緒に持って、主菜などに近づけ、思いを伝えていた。 <sup>⑪</sup> |
|                       | 4/21 下の歯が少しずつ生えてきたこともあり、以前はおかゆなどを飲み込むことがおこったが、口を動かして噛む姿が見られた。 <sup>②</sup> また、食事の量がたりないのか、食事が終わると「あーあー」と言い怒る姿があった。 <sup>③</sup> |                                                                                 |                                                                                  | 7/28 歩行が安定してきたため、椅子に座って食べることにした。 <sup>⑪</sup>                                      |                                                                                              |
|                       | 4/30 家庭と相談し、離乳食を勧めることになり、今日から移行食になった。 <sup>④</sup>                                                                              |                                                                                 |                                                                                  |                                                                                    |                                                                                              |

①)。4月中旬ころには、体調不良によって食事の進みが悪くなったが、後半には、おかゆを口を動かして食べる様子が見られるようになり（下線②）、この頃には、食事の量が不足しているのか、食べ終わると声を出し、怒る様子もみられた（下線③）。このことから家庭と相談して完了食（移行食）に移行した（下線④）。また、5月になると、好きな汁物を指さしで伝えたり（下線⑤）、後半には軟飯を嫌がって食べない（下線⑥）などの自分の思いの表現がみられるようになった。6月に入ると、軟飯を手づかみで食べようとする様子がみられ、ごはんに変更した（下線⑦）。その後、よく嚙んで食べる様子が増えたことから、下旬にはすべて普通食に移行した（下線⑧）。普通食になったことでさまざまな味を経験するようになり、味の多様性による好みが見られるようになった（下線⑨）。また、7月には、食事中に眠たくなるなど生活リズムと食事時間を試行錯誤していた（下線⑩）。下旬には、歩行が安定してきたことにより、保育者の膝から椅子に座って食べるようになり、食環境が変化した（下線⑪）。さらに8月には、副菜の緑色の食べ物など見た目では好みを判断し、拒否の行動を示す様子が見られるようになった（下線⑫）。しかし、下旬になると、指さしで食べたいものを伝えたり、介助スプーンと一緒に持って皿に近づけるなどして食べたいものや食べるペースを表現するようになった（下線⑬）。

## 2) あけみの食事の様子と、あけみとのぞみ先生の食事での関係性

あけみの食事の様子の変容と、あけみとのぞみ先生の食事での関係性の変容について特徴を検討するため、保育士への毎月のアンケート調査の結果をそれぞれ図2-1、図2-2に示した。

これらの図から、3つの特徴が示唆された。第一に、指さしや手づかみ食べが増え、好みの表出で拒否をしたり、スプーンに手を添えるなどをして、あけみは自身で食事を食べる行動が増えると同時に、食事中の想いを伝える様子が増えていった。その結果、自分で食べることに自信や達成感をもっている様子が見られるようになった。

第二に、離乳食の段階が変わることで、完了期の食事になった味覚の広がりとともに好みの表出が増えた結果、のぞみ先生はあけみの食事の拒否反応等から食事の対応を模索している様子が表れていた。

第三に、食事の時間のタイミングについて、食事時間の眠気や、あけみの食事時間の開始などを巡って試行錯誤をしていた時期であることと得点に重なりがみられた。

最後に全体を通して、「食事時間中、安心して食べている様子」の点数が高くなく、変化がみられなかった。これは、どの時期においても、あけみの成長に伴って課題を解決しながら次の課題が生じていたことやあけみ自身の気分のムラの特徴を示していた。

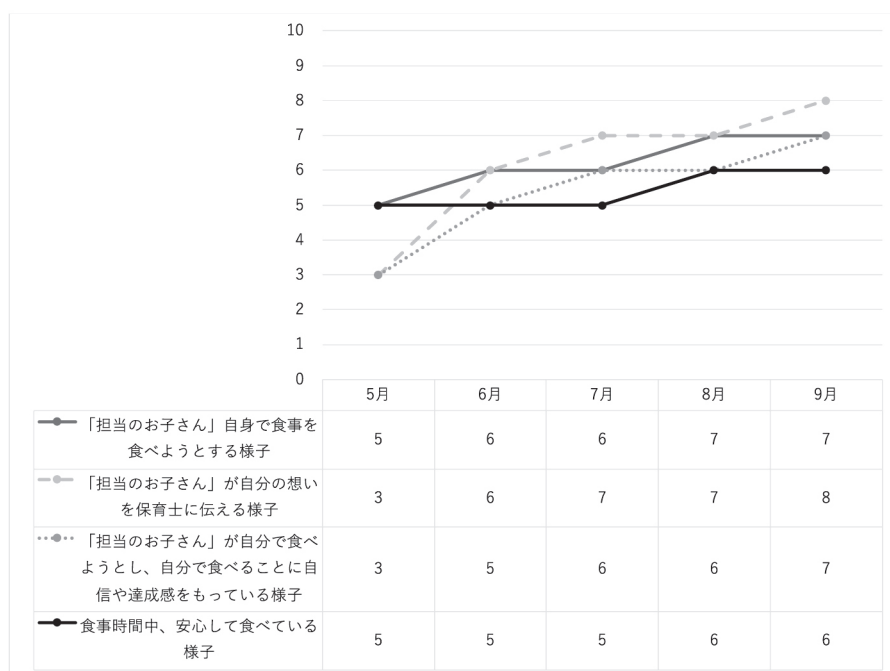


図2-1 あけみの食事の様子の変容

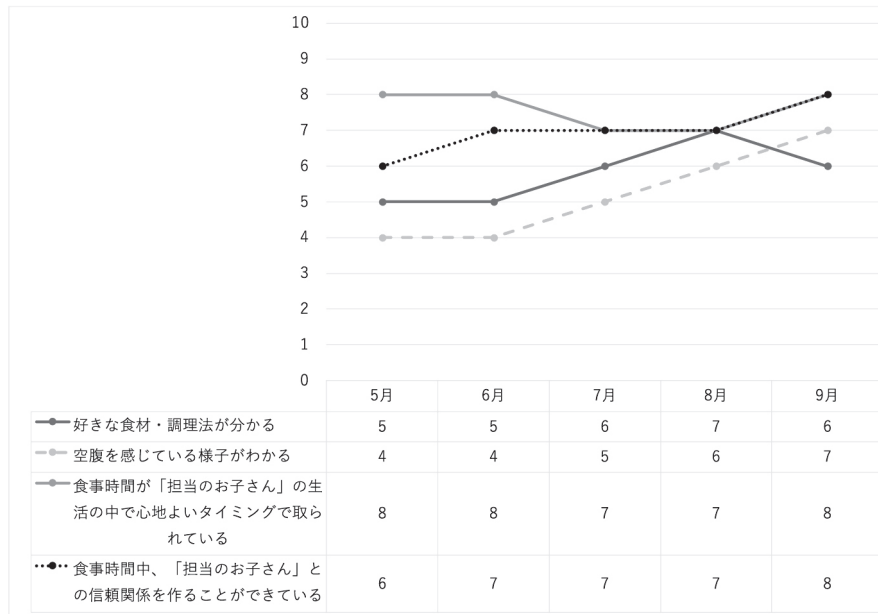


図2-2 あけみとのぞみ先生の食事での関係性

### 3) のぞみ先生が語るあけみの食事の様子とのぞみ先生の支援の変容

調理カレンダー、アンケート調査記述、のぞみ先生へのインタビューをもとに、あけみの食事の様子を検討した結果、①食べ物への反応、②食べることへの意欲、③食事環境への反応の3項目があけみの

食事の特徴を表すキーワードとして挙げられた。

調理カレンダー、アンケート調査記述、のぞみ先生へのインタビューから得られたあけみの食事の変容と保育者の支援を示したのが、図2-3である。あけみの食事の特徴を表すキーワード別にあけみの食事の変容を示すとともに、保育者の支援を示した。

|          |            | 4月    | 5月                               | 6月                              | 7月                    | 8月             | 9月          |
|----------|------------|-------|----------------------------------|---------------------------------|-----------------------|----------------|-------------|
| あけみの様子   | ①食べ物への反応   | 食事後怒る | 指さし                              | 手づかみ                            |                       |                |             |
|          | ②食べることへの意欲 |       | 空腹感がなく、食事量の減少                    | 食事中眠そうにする                       |                       |                |             |
|          | ③食事環境への反応  |       |                                  |                                 | 集中力がなく、食事を一口も食べない日が続く |                |             |
| 食事の段階    |            | 後期食   | 移行食                              | 移行食                             | 普通食                   | 普通食            | 普通食         |
| のぞみ先生の支援 | 食事内容       |       | 後期食から移行食へ移行（4/30）                | 軟飯からご飯へ(6/1)<br>移行食から普通食に(6/24) |                       |                |             |
|          | 時間         |       |                                  | 食事時間を遅くする(6月初旬)                 | 食事時間を早くする(7/26)       |                |             |
|          | 環境         |       |                                  |                                 |                       | スプーンを持たせる(8月末) | 椅子の向き(9月初旬) |
|          | その他        |       | 無理に動きを止めない<br>全体支援 同僚保育者に適宜相談・実施 |                                 |                       |                |             |

図2-3 あけみの食事の変容と保育者の支援の変容



以下では、あけみの食事の変容と保育者の支援の詳細を、あけみの食事の様子を表すキーワードごとに保育者の語りやアンケート調査の記述から検討する。なお、実線の枠（ゴシック体）は調理カレンダーの記述、点線の枠（明朝体）はインタビューの記述を示す。

#### ① 食べ物への反応

##### 【4月】食事後「怒る」意思表示

あけみは昨年度からの在籍児である（担当者は異なる）。あけみは4月下旬頃から、離乳食やミルクを飲み終わった後に「怒る」意思表示をすることが増えていた（下線③）。家でも同様であった（下線1）。

4月21日

下の歯が少しずつ生えてきたこともあり、以前はおかゆなどを飲み込むことが多かったが、口を動かして噛む姿が見られた、また、食事の量がたりないのか、食事が終わると「あーあー」と言い怒る姿があった。③

5月18日

4月の終わりぐらいになってから、食べ足りないのか、ミルクを飲み終わると、「あー」って言って怒るようになって。

ミルクが終わりそうになると、あーっていうふうに言うので、足りないのかなっていうふうには感じていて。そういうのをクラスの他の先生とかも話をして、おうちで。なんかノートにも食欲が増えてきて、家でも足りないのか、よく怒るようになりましたって書いてあるときがあつて。①

のぞみ先生は先述したあけみの食事場面での様子を他の職員にも相談しながらその対応を検討した（下線2、3）。その結果、保護者と相談した上で、4月30日に離乳食から移行食に食事内容を変えた（下線④）。

5月18日

あけみちゃんが4月の終わりぐらいにミルク飲んで、ちょっと怒りだすようになったっていうのを、まず、クラスの職員に伝えて。もしかしたら、足りなく

ておなかがすいていて怒っているのかなって。② ちょうどそのときぐらいに、ノートに家でもそういうふうな姿があるっていうのがあったので、じゃあ、お母さんに食欲も増えてきて食べれるようになったので、ちょっとずつ進めていくのはどうかなっていうのを伝えてみるっていう話になって。伝えて、お母さんから大丈夫ですっていう返事をいただいて、移行食に。

そういう（家でも食後あけみが怒る）話も他の職員と相談して、じゃあ、もうちょっと進めてみるのはどうかなっていう話になって、③ お母さんと相談をして、ちょっと離乳食を進めてみようっていう形になりました。

お母さんとかにおうちでの様子も聞いたら、おうちでも足りないのか、そうやって怒ることが増えてきて、よく食べるようになったっていう話だったので、もうちょっと進めてみようっていうことになって、④ 今、移行食を食べてて。

4月30日

家庭と相談し、離乳食を進めることになり、今日から移行食になった。④

5月18日

（移行食後の心配について）今のところちょっと動き回ったりすることはあるんですけど、今はよく食べるんで、今のところそんなにですね。心配っていうことではないかな。⑤

あけみちゃんが楽しく食事ができることと、ニンジンとかちょっととろみがなくなった野菜も、ちょっとずつ食べればいいのか⑥ っていうふうに思います。

自分でいろんなものを食べてみようって思うふうになったり、いろんな硬いものだったり食材にいっぱい慣れていってほしいかな⑦

あけみは、食事が足りなかったため、食事後に怒っていたことが推察され、後期食を移行食に変えた後は、怒る様子も見られなかったことから、食事内容や量に満足したと考えられる（下線5）。このよ



うなあけみの様子にのぞみ先生はあけみに対して新たな育ちを期待している様子が見取れる（下線6、7）。

#### 【5月中旬】好きな物を指さし

食事内容を移行食に変えたことにより、あけみは食後怒ることがなくなり、自分の食べたいものを指さしし、のぞみ先生に伝える様子が見受けられるようになった（下線⑤）。

5月12日

汁物が好きなようで、指をさしてほしいことを伝えるようになった。⑤

あけみは食事時間中に動き回ることが多かった。しかし、のぞみ先生は、あけみの食事の意欲を妨げないよう、下線8のように、あけみが動き回っても無理に止めるのではなく、あけみの気持ちに寄り添った支援をしている様子が見受けられた。

5月18日

あけみちゃんはすごい動き回るので、それを無理には止めないで、動き回るのは何か気になることがあるのかなっていうふうにも思うので、動き回っているときはあんまり無理に食べさせないで、食事のほうに、ぱって向くときがあるので、そういうときは食事を食べさせてあげている感じです。⑧。なので、その動き回るのも、そんなにはすぐには止めないようにして。ともやくん（のぞみ先生が担当している他の子ども）みたいに全く食べないわけではないので。あけみちゃん、動き回っても自分でまた、食事のほうに向いてしまったりとかすることが多いので、ちょっと何か気になっていることがあったらって動き回ってるのかなっていうふうにも思うので、それを止めて食べてでは、その子も安心して食べられないと思うので、無理にその子の動きを止めないようにしてます。

食事中のあけみの指さしなどから、あけみが食事に対して積極的にかかわろうとしていることがわかる。のぞみ先生はあけみが楽しく食事できることや、色々なものを食べようとする意欲の芽生えを重要視していることから、あけみの気持ちに寄り添った支援を心がけていることが見受けられる。アンケート

でも、のぞみ先生は子どもの食事に関して、自分で食べようとすることや楽しく食事することに重点を置いていたことから、食事場面であけみが不快な気持ちを持たないように配慮した支援を心がけていたと考えられる。

#### 【6月中旬】手づかみ食べ

6月に入り、あけみは自分から食材を手づかみ食べする様子が見られた。のぞみ先生が介助スプーンで食べさせようとする際も、子どもの指さしや手づかみ食べの様子等を踏まえた支援をすると嫌がらずに食べられることがインタビューで語られていた（下線9）。

6月23日

自分でまず食べたくて、手づかみでいろんなものを食べて。自分で手づかみで食べるのが満足すると、介助スプーンで食べさせても、あんまり怒らないかな。最初の頃は、それがまだちょっとよく分かってなくて、手づかみして食べて、私があげてとやってやると、口を開けてくれなかったりすることもある。最近だんだんと自分で手づかみで食べて、なにか欲しいものがあったりすると、こうやって指をさしたりするので、そういうときは介助スプーン使って食べさせたりすると、そういうときは割とすんなり嫌がらず食べてくれたり、まだ口でもぐもぐかんでいる。⑨。ときに、次のスプーンにのせて近づけようすると、まだ食べてるからいいみたいな感じで。あけみちゃんなりに意思表示をしているんだなっていうふうに。

野菜等を手づかみで食べる様子が見られると、のぞみ先生は以下のように、同僚の保育者と相談する中で主食も手づかみできるように軟飯からご飯へ移行することを決めた（下線⑦）。また、食事に興味・関心を持ち出したあけみの様子から、のぞみ先生は保護者とも話す中で、移行食から普通食に移行したい旨も考えていた（下線10、11）。

6月1日

軟飯を食べていたが、ごはんを手づかみで食べようとする姿が見られたので、手づかみたべがしやすいよう軟飯からごはんに変更した。⑦

6月23日

あけみちゃんも最初の頃は、手づかみ食べ用の野菜スティックしか、手でつかんで食べようとしなかったんですけど、だんだん自分で食べたいという思いが出てきたのか、いろいろ自分で指さしたりとか、手づかみで食べるようになりましたっていう話とかも、クラスの先生と話していて。最近をよく、前は歯が下、2本ぐらいしか生えていなくて、かむっていうよりは、ちょっと歯茎でつぶして飲み込むみたいな感じだったんですけど、だいぶよくかんで食べるようになったので、食べられる食材も増えてきたので、おうちの人と相談して、普通食にだんだん移行していったらどうかなっているふうにアドバイスをもらったり。<sup>10</sup>

今、移行食を食べているんですけど、もう1歳過ぎて、よく最近食材をかむようになったので、おうちで食べられる食材も増えてきたので、普通食に移行していきたいかなというふうに思っています。<sup>11</sup>

あけみの手づかみ食べの様子から、のぞみ先生はあけみの食べる意欲を感じており、保育者同士でもあけみの食事の様子が話題にあがっている。また、食べる意欲が出てきたことに伴い、食べるものや、食べ方等も変化している様子がみられた。

5月末にあけみは家や保育所で食べない日が続いたこともあったが、この時期になると食べられるものも増えてきた（下線12、13）。このようなあけみの食事場面の様子から食事内容を見直し、6月末に移行食から普通食に変更した（下線⑧）。

6月23日

家でも最近食べるようになったみたいなんですけど、以前は全然、食べないっていうときもあったみたいで。<sup>12</sup>

あけみちゃんもこれからちょっと普通食に移行して、まだ硬いものとか、歯があんまり生えていないっていうのもあるんですけど、それこそいろんな硬いものとかも、たくさん食べれるようになってほしいなと思う。<sup>13</sup>

6月24日

移行食もたくさん食べられるようになったり、よく噛んで食べる姿が増えたので、家庭と相談し、移行食から普通食を食べるようにした。<sup>⑧</sup>

食べられなかった頃と比較して、あけみの成長がみられる時期の語りである。先述の食べる意欲の芽生えとともに、「自分が食べたいものを食べられるように」というのぞみ先生の願いが実際に食事場面で子どもの様子として表れていた時期だと推察される。

## ② 食べることへの意欲

### 【5月下旬】食事量の減少

5月末になると軟飯を嫌がるようになり、あまり食べなくなった（下線⑥）。食事量の減少だけでなく、食事時間中に動き回ったり、寝てしまったりする様子も多々見られた。

5月24日

軟飯を嫌がるようになり、軟飯だけスプーンにのせると口に入れようとしなくなった。<sup>⑥</sup> おかずなどを混ぜると少しだが食べてくれる。

6月23日

あんまり食べなくなって、今まで完食していたのが全然、食べなくなったり、ちょっと遊びだしたり、動き回ったりすることが増えたので。<sup>14</sup>

食事が始まって、しばらくはひざの上で座って食べているんですけど、落ち着いて食べて、自分が食べたいものを手づかみで食べたりするんですけど、眠くなってくるからなのか、ちょっと動き回ってっていうか、私のひざの上に立とうとしたりすることがあって。それが始まったら眠いかなっていうサインかなというふうには思っているんですけど。<sup>15</sup> 動き回ったりするので、ひざの上で食べているっていうのもあって、ちょっと危ないなっていうふうには。急に立ち上がろうとしたりすることもあるので。そこがちょっと。でも、だいぶ落ち着いて食べる時間も増えてきたので。

あけみちゃんがすごい朝、早起きだったりして。4時

台に起きるときとかもあつたり、(中略) 早起きの日は、食べている最中で寝ちゃうときもあつた。<sup>16</sup> 後期食から移行食に変えた直後ぐらいには、よく食べてはいたんですけど、あんまりおなかが、なんかすごいクラスの中で一番、早い10時半ぐらいに食事をしていて、それであんまりまだおなかがすいていないのか、食べないときもあつたので、<sup>17</sup>

あけみは起床時間が日によって異なり、早く起床した日は昼食時に寝てしまうこともあった。そのため、あけみの昼食時間は子どもたちの中で一番早い10時半に設定されていた。しかし、今まで完食していたあけみが、食べなくなったり動き回ったりと食事に興味を示さなくなった(下線14~17)。のぞみ先生は心配して同僚の保育者に相談したり、子どもの様子を観察したところ、起床時間が遅い日は、朝食と昼食の時間が詰まりすぎておりあけみがお腹をすかせていないため、食欲がないのではないかと推察された。そのため、あけみの昼食の開始時間を11時開始にしたところ、落ち着いて食事に向き合えるようになった(下線18~21)。

6月23日

移行食に変えた頃はよく食べていたんで。その頃はそんなにあんまり相談することはなかったんですけど、だんだんだんだんおなか、近い時間だからか、あんまり食べないとかっていうのがあつたときには、もしかしたらおなかがすいてないから食べないんですかねみたいな感じで相談して。<sup>18</sup> 試しに時間をちょっと遅くしてみるみたいな感じでアドバイスもらって、変えてみたりとか。時間を変えてみたら、おなかすいてる時間に食べているからか、落ち着いて食べれた様子とかもクラスの先生と共有して。

ちょっと時間を30分ぐらい遅くしてみたら、よく食べるようになったりとか。<sup>19</sup>

クラスのリーダーの先生にちょっと食事の時間、もしかしたらおなかがすいてないのかもしれないっていう話をして、(中略)じゃあ、やってみますって言って、30分ちょっと遅らせて、1回やってみたら、落ち着いて食べたりすることが増えたので。<sup>20</sup>

(それは時間を)ずらして、おなかがすいている時間に食べているからかな<sup>21</sup>っていうふうには(思います)。

食事量が減退したあけみに対し、のぞみ先生は周りの保育者に相談しながら、解決策を探っている様子がうかがえる。あけみの起床時間が定まっていなかったことから、朝食が遅いときはお腹がすいていないのではないかと考え、昼食時間を30分遅くしたところ、落ち着いて食べられることが多くなったとのことであった。本事例から、乳児の食事が生活リズムと密接に関係していることがわかる。

## 【6月初旬】食事量の減少

6月初旬に昼食時間を10時半から11時に変更したが、7月末になると食事時間中に眠そうにするあけみの様子が頻繁にみられるようになった(下線22、23)。

9月15日

(10時半から11時になったときは、あんまり食べなかったからっておっしやつた。)そのときは食べなかったんで、全然。変えてみたら、遅くしたら食べれるようになったんですけど、でもその後ぐらいからまた朝早く起きてるときとかが増えてきて。眠そうにしたりとかしてて…。<sup>22</sup>

眠くなったのもあるし、おなかがすいてる様子も見られたので。<sup>23</sup>

5月末には昼食開始時間が早すぎて、あけみのお腹がすいていなかったことから食べられない様子がみられた。そのため、昼食開始時間を遅くしたが、その後、あけみの起床時間が早い日が多くなり食事中に眠くなる様子が見受けられたため、昼食時間を再度早め、11時から10時40分開始に変更した(下線⑩、24)。それにより眠気が解消され、あけみが食事に集中することができるようになった(下線25)。

7月26日

食事中に眠たくなってしまうことが増えたので、食事時間を11:00から10:40に変更した。<sup>⑩</sup>

9月15日

ちょっとまた眠くなったりしたので。一番最初の時間に変えて。<sup>24</sup>

食事中に眠そうにすることは減ったかな<sup>25</sup>

あけみは起床時間にばらつきがあったため、食事時間を遅くしたが、あけみの生活時間の関係から再度早めの時間に戻している。乳児の食事は生活リズムと密接に結びついており、その時々によって変化が大きいので、個々の子どもに応じた細かな対応が必要となる。

### ③ 食事環境への反応

#### 【7月・8月】食事を一口も食べず動き回る

7月・8月になると、あけみは嫌いな食べ物はもちろん、一口も食べない日が続いた（下線⑨⑫）。あけみは気分のムラが激しいため、好物の汁物や魚は日によっては食べることがあったようである（下線26、27）。のぞみ先生は無理に食べさせるのは避けたいと考える傾向があり、汁物の好きなあけみの意向を汲み、あけみが食べられるものを食べさせていた（下線28）。また、食事中にあけみがよく動くことも、のぞみ先生を悩ませているようであった（下線29）。このようなあけみに対してのぞみ先生はどうして食べてくれないのかわからず困惑していた（下線30）。

7月16日

魚が好きでよく食べる本児だが、今日のあじのマリネは食べ慣れていないのか、1口食べると口から出し、その後は食べようとしなかった。<sup>⑨</sup>

8月16日

副菜を食べなくなり、見た目（緑色）で判断しているのか、スプーンを近づけても口を開けようとしなかった。<sup>⑫</sup>

9月15日

あけみちゃんは、自分の思い通りにいかないことがあると泣いて、そこから本当に食べれなくなったりとか。以前は一番最初の時間にご飯を食べてても眠くなっちゃって全然食べれなくて。汁物は好きなので、汁物だけは食べて、ご飯とかは、主菜も魚が好きなんです

けど。お魚の日は食べるんですけど、お肉とかだと全く食べないとかっていうのが続いてて。<sup>26</sup>

6月とかは何でも食べてたんですけど。（中略）7、8月は本当に。魚のときは食べるけどお肉は全然食べないとか。最近は副菜があんまり好きじゃないのか、残すことが増えてきたんですけど。<sup>27</sup> ちょっとずつ好き嫌いが出てきたのかなっていう。

一口も食べない。本当に眠たくて、泣けちゃって一口も食べないっていうときは。（中略）好きなものだけでもまずは食べれたらいいかなっていうふうな感じで。無理に全部食べさせるんじゃなくて、食べないときが続いたので、そのときはちょっとでも何か口にできたらそれでいいかなっていうふうに切り替わるようにしました。<sup>28</sup>

結構、動いてて。食事中なのに立って移動しようとしてたりとかすることもあって。<sup>29</sup>

そのときは何が嫌なのかとか、気持ちを読み取るのがすごい難しかったかな。<sup>30</sup>

あけみが食事を一口も食べず動き回る日が続き、のぞみ先生はどうしたらよいのか悩み、同僚の保育者に相談していた。そのような中、本研究の撮影時に、同僚の保育者がスプーンに興味を持っているあけみの様子に気づき、のぞみ先生にスプーンを握らせることを提案した（下線31）。あけみはスプーンを持つと少し落ち着くようで、食べる量もだんだんと増えていった（下線32、33）。このようなあけみの姿に、のぞみ先生はスプーンをすくって自分で食べるという経験をさせたいというあけみの食事に対する新たな思いを口にしていった（下線34）。

9月15日

あけみちゃんが大人のスプーンに興味を持っていたので、副園長のほうからスプーンを使ってみてもいいんじゃないっていうふうにアドバイスをいただいて。<sup>31</sup> そこからスプーンを使うようになって。そんな感じがすね。（中略）8月の終わりぐらい（から）。

最近、大人の介助スプーンが気になってたので、あけみちゃん用のスプーンを用意してあげると、スプーン持つてることでもちょっと落ち着くのか、ちょっとずつ



食べる量が増えてきて。<sup>32</sup> 7月8月は本当に一口も食べないとか、一口だけしか食べないっていうときがあったんですけど。今は結構、スプーン持ってちょっと落ち着いたこともあって、半分食べれる日もあるし、全て食べれるときもあるので、<sup>33</sup> そうですね、増えてきたかなっていう感じです。

スプーンを使い始めたので、スプーンですくって自分で食べるっていう経験をたくさんさせてあげたいな<sup>34</sup> っていうふうに。

8月25日

本児の中で食べたいものやペースが決まっているのか、指をさして食べたい物を伝えたり、介助スプーンを一緒に持って、主菜などに近づけ、思いを伝えていた。<sup>⑬</sup>

本事例は、子どもが何を欲しているのか、丁寧に見ていくことの大切さを示した例であると考えられる。「スプーンを持つ」というあけみの欲求が満たされたことで、あけみの中に安心感や心地よさが生まれたと推察される（下線⑬）。それにより、気持ちの落ち着きに繋がり、食べることに集中することができるようになったと考えられる。食べさせていると「食べない」ことばかりに意識が向きがちであるが、目の前の子どもが何を望み、何に不安や困難さを感じているのかを俯瞰的な視点から見取ることが必要である。

ただし、あけみはやはり椅子から立ち上がったたり動き回ったりすることが多かった。のぞみ先生が同僚の保育者に相談すると、椅子の向きを壁向きではなく、あけみが部屋全体を見渡せるようにしてはとアドバイスをもらい、9月になって椅子の向きを変更した（下線35）。すると、友達が食べている様子が見えるようになったことで、落ち着き、動きが少なくなった（下線36～38）。

9月15日

7、8月と、全然食べないときがあったり、集中力がなかったりすることがあったので。集中力がないのが周りが気になるっていう話をしたら、「壁を向いて食べてるけど、ちょっと周りが見える位置に変えてみたらどうか」っていうアドバイスをもらったんです。<sup>35</sup> 変えてみたらちょっとずつ食べれるようになったので。

壁に向かってたのを、隣が見える位置に椅子を変えて。（中略）壁向きにしてたときは、ともやくんと一緒に立ってみたりとかっていうのがありましたので。みんな食べてる様子が見えるようにしたら、それほど動かなくなっただけっていう感じですかね。<sup>36</sup>

あけみちゃんも周りが気になるので、今までは座る椅子を壁向きにしてたんですけど。一度、隣の机が見える位置に変えたら、周りが見えるからちょっと落ち着くのか。椅子の向きを変えたりしてとかもあって、ちょっとずつ食べれるようになってきたかなっていう。<sup>37</sup>

1週間は座って。ちょっとずつ集中して食べれるようになってきたかな<sup>38</sup> っていう。

椅子の位置（の変更）は、9月入って最初のほうぐらい。

食事時間中、食べることに集中できていない様子があったため、食事環境そのものに目を向け、座る位置を変更したところ、食事に集中できる様子が見られた。物理的な環境そのものが子どもに与える影響を顕著に表しているといえる。

#### 全体的支援一同僚保育者への相談

アンケート調査から、のぞみ先生は意欲的に食べることや食への興味・関心を持つこと、多様な味や触感に触れ楽しむことを大切に考えており、このようなのぞみ先生の思いはインタビューでも語られていた（下線39、40）。

9月15日

スプーンとか使い始めたり、場所を変えたことによってたくさん食べれるようになってきたので、そのまま、気分のムラはあると思いますが、自分で食べれたっていう経験をたくさんして食事の時間が楽しみになればいいな<sup>39</sup> っていうふうに思います。

あけみちゃん周りがすごく気になるので、周りが見える位置で食事をするようにしたり、気分のムラがあるので、食べないっていう、泣けたり首を振ったりっていう意思表示をするようだったら無理に食事をあげるのとかではなくて、ここで「じゃあ、もうごちそうさまにしようね」っていうふうに、あけみちゃんの思い

をくみ取って声かけしてかわるように。<sup>40</sup>

一方で、アンケート調査から、のぞみ先生はマナーを身に付けたり、好き嫌いを何でも食べられることに対しては、他の保育士と比べるとそこまで重要とは考えていないことも示された。そのため、食事量の減少や動き回ることにに対して心配はしているものの、あけみの思いを汲み取るような支援を行うことが多かった。そして、直接的なあけみとのかかわりにおいては無理強いをしないようにしていた。また、のぞみ先生はあけみの食事に関して悩んだり迷ったりすると同僚保育者に相談しながら支援を工夫することが多かった。

#### 4) あけみとのぞみ先生の事例を通して

のぞみ先生は自分で食べられるという経験を重要視し、あけみとの信頼関係の構築に重点をあてて支援していた（無理強いをしたくない等）。そして、あけみにとっての心地よい食事環境をどのように作ればよいのか試行錯誤しながらあけみと関わっていた。その中で、あけみの食事の心地よさを支える要因として、以下の3つが示唆された。

第一に、食事量の増減を食事場面での子どもの様子からだけでなく、生活リズムとの関係から支援していた。子どもの食事場面での姿は、家庭での起床時間や朝食時間、食事前の活動量や活動内容、その日の子どもの心情など様々な要因が重なって現れる。のぞみ先生が家庭での子どもの様子や保護者の食事援助観など、多角的な観点から子どもの食事を

捉えようとしたことが、あけみにとって心地よく食べることに影響を与えたと推察される。

第二に、食事環境にも目を向けていた。特に、あけみは気分のムラが激しい特徴を有し、それが食事場面においても食事量や行動を介して表れていた。そのような状況下で、のぞみ先生はスプーンを持たせたり椅子の向きを変えたりすることで、あけみにとっての心地よい食事空間を作り出そうとしていた。それらの支援に対し、あけみは食べることに安心感やのぞみ先生への信頼感を高めていったと考えられる。

第三に、のぞみ先生があけみの食事の様子を一人で抱え込まず、同僚保育者にアドバイスを求めながら、あけみの心地よい食事場面を作り出そうとしていた。あけみと関わり始めた頃ののぞみ先生はあけみの意思を尊重し、子どものペースで食べさせるなど食事場面における直接的な支援を工夫していた。しかし、他の保育者のアドバイスから、環境構成や生活リズムとの関係性等にも目を向け、柔軟に自身の支援に取り入れるようになったことで、あけみの心地よい食事に繋がった様子が事例を通して示唆された。

## 2. けんじと担当保育士みどり先生の事例

### 1) けんじの離乳食の変容

表3に示す通り、入園当初は初期食で、慣れてきたので4月下旬頃裏ごしからつぶしに変更した（下線⑭）。自分でスプーンを唇でとりこめている（下線⑮）。離乳食よりミルクの方が好きな様子だが、よく噛んで食べており（下線⑯）、5月中旬に中期

表3 けんじの離乳食の変容

|                       | 5月                                                                                                                                | 6月                                              | 7月                                                                                                                           | 8月                                                                 |
|-----------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|--------------------------------------------------------------------|
| 食<br>形<br>態           | 4/22 初期：主菜（人参のだし煮）裏ごしていたが、慣れてきたのでつぶしへ変更 <sup>⑭</sup>                                                                              | 記載なし                                            | 7/6 中期→後期（本日より移行、食べられる量が少し増え、舌と上あごで上手くつぶせる） <sup>⑮</sup>                                                                     | 記載なし                                                               |
|                       | 5/13 初期→中期                                                                                                                        |                                                 | 7/16 副菜（人参スティック）後期の形状に慣れてきたので、スティック状にした                                                                                      |                                                                    |
| エ<br>ビ<br>ソ<br>ー<br>ド | 4/19 あまりに空腹すぎて離乳食の前にミルクを飲ませてしまい、ほとんど食べないが、食べることはわりと好きな様で、唇の上にスプーンをのせると、しっかりと自分でとりこむ <sup>⑯</sup> 。保育園での離乳食は裏ごしていたが、つぶしに変えていこうと思う。 | 6/9 汁ものが好きで、機嫌が悪く、他のものは食べなくても汁だけはむ <sup>⑰</sup> | 7/4 後期になってから食べる意欲が出てきて、 <sup>⑱</sup> 食べられる量も増えてきたので、食後の量が大幅減ってきた。イスに座ると手ふきタオルを持つようになり、座る一手をふくの流れがわかってきた。                     | 8/10 完食が多い。よく噛んで食べている。 <sup>⑲</sup> 手づかみする様になってきた。                 |
|                       | 5/6 離乳食よりミルクの方が欲しいアピールを担任にするとの事だが、全く食べないわけではない。じやがいもも、やや大きいものでも咀嚼して食べられる。 <sup>⑳</sup> もう少し慣れてきたら中期へ移行してもいいかもしれない。担任と相談したい。       | 6/19 食べる量も増えてきたので、ミルクの量も減ってきた <sup>㉑</sup>      | 7/29 主菜皿から取り皿へ食材をのせると手でにぎるが、ほとんど口へは持っていない。にぎったりつぶしたり感触を楽しんでいる様子。 <sup>㉒</sup> 1週間位ゲリが続いて病院からノンラクト（乳糖不耐症ミルク）をすすめられたらしい。食欲はあり。 | 8/16 手づかみが好きで援助用スプーンで口元へ持って行っても食べない。 <sup>㉓</sup> 自分でやりたい気持ちがみられる。 |

食へ移行した。6月に入ると、汁物を好む姿がみられた（下線⑰）。6月中旬頃に離乳食を食べる量が増え、ミルクを飲む量が減ってきた（下線⑱）。そして7月初旬に食べられる量が増え、食材を舌と上あごでつぶすることができるようになったため後期食へ移行し（下線⑲）、食べる意欲もみられるようになった（下線⑳）。7月下旬には食材に興味を持ち始め、食材を触り感触を楽しんでいたが、まだ食材を口に運ぶことはしなかった（下線㉑）。8月に入ると、よく噛んで食べ、完食することが多くなった（下線㉒）。そして、自分で食べたい気持ちが強くなり、保育士が援助用のスプーンをけんじの口元へ運んでも拒否し手づかみで食べる姿がみられた（下線㉓）。

## 2) けんじの食事の様子と、けんじとみどり先生の食事での関係性

けんじの食事の様子の変容と、けんじとみどり先生の食事での関係性の変容について特徴を検討するため、みどり先生への毎月のアンケート調査の結果をそれぞれ図3-1、図3-2に示した。

これらの図から、3つの特徴が示唆された。第一に、けんじは調査期間を通して、食事時間に自分から席に向かう様子が見られなかった。けんじは9月頃にしっかりと座ったり、座った状態からずりばいができるようになったりするなど、調査期間中は自ら動いて席に向かうことは難しかったが、抱っこの場合にも、自ら身を乗り出して食事の席に向かう

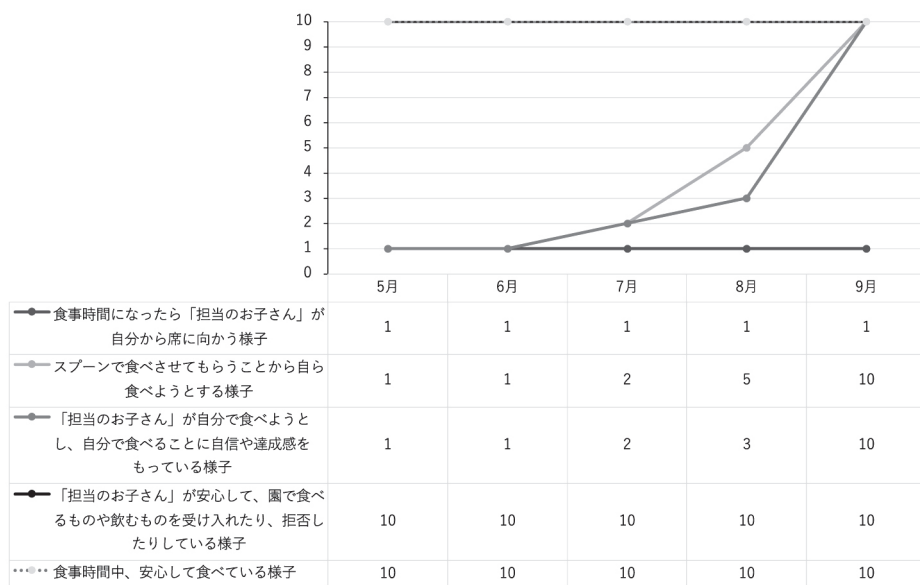


図3-1 けんじの食事の様子の変容

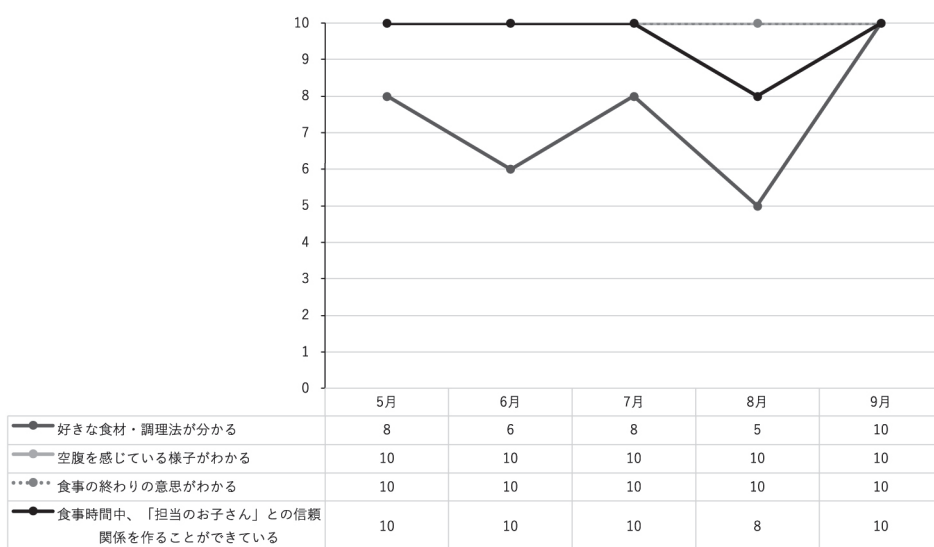


図3-2 けんじとみどり先生の食事での関係性

とする様子はあまり見られなかった。

第二に、けんじは食事時間中、安心して食べる姿がみられ、みどり先生がけんじの食事リズムや食事の終わりのサインを把握できていることが、けんじが安心して食べることができる要因として考えられた。

第三に、けんじの自分で食べようとする様子、自分で食べることに自信や達成感をもっている様子が徐々に増えていった。

### 3) みどり先生が語るけんじの食事の様子とみどり先生の支援の変容

けんじの日々の食事に関する調理カレンダーおよびB園独自で記入していた離乳食チェック表、みどり先生へのアンケート調査およびインタビューの内容をもとに、入園から9月までのけんじの食事の様子を検討した結果、けんじの食事の様子の特徴として、①食事環境への反応、②咀嚼・嚥下の発達、③食べ物への反応・食べることへの意欲の3つが挙げられた。

けんじの食事の様子とみどり先生の支援の変容を図3-3に示した。けんじの食事の様子を表す3つの内容別にけんじの食事の変容を示すとともに、みどり先生の支援を示した。

以下では、けんじの食事の様子とみどり先生の支援の変遷について、みどり先生のアンケート内容やインタビューでの語りから、具体的に検討する。な

お、点線の枠はインタビューでのみどり先生の言葉を示す。

#### ① 食事環境への反応

##### 【入園当初】椅子に座ることへの拒絶

けんじの食事援助の難しさとして、みどり先生は、初回（5月下旬）のインタビューで4月の入園当初を振り返り、「はじめの頃、椅子にまだ座れなかったの、膝の上で食べていました」と語った。その時の戸惑いを、次のように述べていた。

5月21日

椅子に座ったときに、何かに刺されちゃったのかなっていうぐらいの「きゃあ」だったので、ごめんなさいっていう。本当に。感触が嫌だったのか、初めての経験でとてもびっくりしちゃったのか。申し訳ないことしちゃったなという気持ちで、ごめんねっていう感じですぐ抱きかかえて。<sup>41</sup> それから機嫌が戻ることはなかったので、ミルクを飲んで終わってしまったという感じになってしまったんですけれども。（中略）こまですごい泣いたっていう子はなかったんですよ。以前もとても嫌がりますっていう子は何人もいたんですけど。今回のけんじに関してはすごいい反応だったのでかなり驚きました。<sup>42</sup>

|          |                   | 4月                              | 5月                                          | 6月                | 7月             | 8月 | 9月 |
|----------|-------------------|---------------------------------|---------------------------------------------|-------------------|----------------|----|----|
| けんじの様子   | 食事環境への反応          | 椅子に座りたがらない                      | 身体がふらふらして安定しない                              | 少しずつ安定してきたが、まだ不安定 | 身体が安定          |    |    |
|          | 咀嚼と嚥下の発達          | 食べ物を唇で取り込める                     | しっかりもぐもぐ時々詰まらせる                             | 咀嚼が上手に            |                |    |    |
|          | 食べ物への反応・食べることへの意欲 | 興味はあるが、怖くて食べ物に手を出せない            | 食べ物を手に取り、口に運ぶうまく入らないと口に入れ直す姿も               | 手づかみで食べる          | つまむ保育士のスプーンを拒否 |    |    |
|          | 離乳食の段階            | 初期食                             | 中旬～中期食                                      | 後期食               |                |    |    |
| みどり先生の支援 | 食事環境              | 膝の上に座って食事                       | 椅子に座って食事<br>タオルで安定させる                       | タオルを使わず<br>体幹に任せる |                |    |    |
|          | 一口量・タイミング         | むせたり詰まらせたりしないよう注意してスプーンにのせる量を調節 | 口の中の状態を確認し、本人のペースに合わせて口の前にスプーンを用意するタイミングを判断 |                   |                |    |    |
|          | 食べ物の置き方           |                                 | 小皿に手で握れる大きさ・固さの食べ物を乗せ、手の届くところに置く            |                   |                |    |    |

図3-3 けんじの食事の様子とみどり先生の支援の変容



みどり先生はこれまで0歳児クラスを複数回担当してきた経験の中では予想しなかったけんじの反応に驚き、戸惑った（下線41）。そして、即座にけんじに対して申し訳ない気持ちになり、椅子に座らせることをやめた（下線42）。

みどり先生によればけんじは繊細なお子さんである。当時、みどり先生がけんじの保護者に家庭での様子を尋ねたところ、家でも床に座ることができないと聞いた。みどり先生はこのようなけんじの様子を受け、膝の上に座って食べる方法に変更した。けんじの思いを尊重しつつ、模索しながらけんじの食事援助を行っていたことがわかる。

なお、5月上旬のアンケートからは、「泣いていたのに、食事を見た途端、泣き止む」姿を記述しており、けんじが食事に対して興味を表していたことがうかがわれる。

#### 【5月下旬】椅子に座れるようになる

みどり先生は5月中旬頃までけんじを膝の上に座らせて食事援助をし、5月中旬を過ぎた頃に、けんじを椅子に座らせてみた。その時のことを、次のように語っていた。

5月21日

2、3日前ぐらいから、椅子にチャレンジしたところ、1日目はとても大泣きされてやめたんですが、それ以降、3日目辺りぐらいにチャレンジしたところ泣かずに椅子に座れるようになったので、そこから食事を始めました。すごい成長ですね。

（1日目の後、）次の日もチャレンジしました。ごはん、食べようねって抱っこしながら声掛けして、お椅子、座るよって言って座らせたら泣かなかったんですよ。でも長い間、座ってはいられなかったんです。だから、給食をあげるタイミングだったのか、座り心地だったのか、まだその辺が分からないんですけども、<sup>43</sup>給食を食べている間に突然「ぎゃあ」って泣き始めちゃったので。<sup>44</sup>だから、抱っこでお膝に座ってごはんにしたんですけどね。<sup>45</sup>

このようにみどり先生は、けんじの反応の仕方を見ながら、徐々に椅子に座らせることを試した。二日目には椅子に座ることができたものの、突然泣き始めたことから、元の膝の上で食べる方法に戻した

（下線44）。みどり先生は、けんじが突然泣き始めた理由はわからないが（下線43）、それまでけんじが好んでいた膝の上で食べる方法に戻した（下線45）。数日間、けんじの様子を見ながら椅子に座らせてみることを試した末、けんじは3日目に椅子に座って食べられるようになった。

また、けんじの身体の様子について、次のように語っていた。

5月21日

けんちゃんの体形に合った椅子ではないと言ったほうがいいのかな。背もたれは調節できるんですけども、横幅がかなりけんじにとっては広過ぎてしまって、まだけんちゃん自身もちゃんと座れる状態ではないので、座らせてもふわふわ、こんな感じでふらふらってしまうんです。なので、気持ちどっぴかに寄せるか、あとは、椅子と身体の間にタオルか何か引いてけんちゃん自身の身体を固定させて食べるとか…

このように、椅子に座れるようになってからも、けんじ自身の身体がまだ安定して座れるまでには発達しておらず、タオルなどを挟んで安定して座れるように試行錯誤していた。

#### 【6月下旬～7月下旬】椅子に座るが、ふらふらしてしまう

6月に入っても、椅子に座るものの、体勢が安定しないことが食事援助の難しさとして挙げられた。6月のインタビューで、みどり先生は次のように語っていた。

6月23日

今はやっと椅子に座って食べられるようになってきて。ただ、（中略）椅子に座らせてもふらふらしてしまう状況なので、タオルを敷いたりして安定して食事に向き合えるようにしているんですね。（中略）まだふらふらって感じになってしまってるので、気を付けながら、安定して食べられるようにしています。

6月下旬のアンケートで尋ねた食事援助の難しさには、「イスにまだ上手く座れないので、提供時に口元へスプーンをもっていくのに緊張を感じる時がある」と書かれ、けんじにスプーンで食事をあげる

時の危険性について気をつけていたことがうかがわれる。椅子にまだうまく座れないということについて、この時期のけんじの腰の据わりとの関係について尋ねると、みどり先生は、次のように語った。

6月23日

座ること自体はだいぶ安定しつつはありますね。ただやっぱりまだ、椅子が大きいのか、そう言われるとそうですね。安定、床に座ってても数秒間は座ってられるけれども、気付くと、ころんってそのまま横になったりしているので、座れてないのかな。体がちっちゃいから、その安定的な部分でまだ取れてないのかな。椅子の幅、何かがないとフォローできないのかなと思いますね。

5月中旬を過ぎた頃から、けんじは椅子を嫌がらなくなったため座っているが、2ヶ月後の7月下旬にも体勢が安定しないことについて椅子と身体の間にはタオルを挟むなどして試行錯誤していた<sup>46</sup>。なお、9月上旬のインタビューで、みどり先生は次のように語っていた。

9月9日

今はもうだいぶ安定したので、それ（タオル）を取り外して、彼が楽に座れるようにっていうか、彼の体幹に任せて座らせています。

この時期のけんじの身体の発達についても、みどり先生は「だいぶしっかりと座れて、座った体勢からずりばいの姿勢に変えることができたりとか、つかまり立ちができたりとか、すごい成長してるんです、今。」と語っていた。この時期の身体の著しい発達が食事場面でけんじの様子や保育士の環境構成にかかわる支援の変化に表れることが示唆される。

## ② 咀嚼・嚥下の発達

【5月下旬～6月下旬】咀嚼の発達と嚥下に関する注意—咀嚼の丁寧な観察

5月上旬のアンケートで、みどり先生は「咀嚼している姿（様子）が、食材をすりつぶす状態から噛んでいる姿へ変わろうとしている」と記述した。また、5月下旬のインタビューでも、次のように述べていた。

5月21日

初期だったんですが中期に変わって、かなり初期のときから結構、口をあむあむって感じてごはんを食べていたのでこれはいけるかもしれない<sup>46</sup>っていう。給食さんとも相談をして、ペースト状の主菜や副菜とかもかなり完食できるような状況だったので、中期に変わって。それから若干、中期になるとペースト状から刻みに入るので、口の中にいろいろと固形物があるんでしょうね、きつと。だから、しっかりといろんなものをもぐもぐと、あむあむしながら食べていますね。<sup>47</sup>

3-2-1)でも示したように、けんじは、4月下旬頃に裏ごしからつぶしに変更し、スプーンの上の食べ物をしっかりと唇でとりこむことができていた。よく噛んで食べることができていたため、5月中旬から中期食へ移行した。インタビューでも、中期食への移行について調理担当者とも相談した上で判断したと語っていた。さらに、このときのインタビューは移行して一週間経った頃であったが、「しっかりと」もぐもぐ、あむあむできていると述べていた（下線47）。

同時に、嚥下に関しては、「気を付けないとむせてしまうことがまだあるので、スプーンに乗せる量とかを調節しながら提供していますね」と述べていた。離乳食チェック表には「じゃがいもをつまらせる様子がみられた。しらすの和えているものも少しのどにつまらせぎみだった（5月25日）」「白米をつまらせている姿があったので、汁物をすぐに提供した（5月28日）。」「今日は主菜をつまらせる姿がみられた（5月31日）」との記載があり、中期に移行して嚥下がうまくいかない日があったことがうかがえた。6月下旬のインタビューでも、同様のことが語られていた。

6月23日

たまに完食できるようになってきたんです。咀嚼自体も初期から中期に変わって、ごはんとかの固さっていうか、水分がなくなりつつある感じなので、詰まらせないかなっていう感じでひやひやはしてるんですけども、量を調節しながら提供することで上手に咀嚼をして飲み込んでるので。

このように、咀嚼や嚥下の様子を丁寧に見ながら、食べ物でむせたり、詰まったりしないように注意して食事援助を行っていたことがわかる。

#### 【5月下旬】次の食べ物を用意するタイミングの配慮

5月は、前節でもみたように、けんじはみどり先生の膝の上に座って食事をしていたため、みどり先生にとってけんじの咀嚼の仕方や口をどの程度開けているのかを見るのが難しいということであった。そのような中で、みどり先生がけんじの咀嚼の様子を細やかに観察するとともに、けんじの食べたいタイミングやペースを模索しながら配慮している様子が語られた。

5月21日

けんちゃんが安心して食べられるように常に声掛けをしたりとか、あとは、咀嚼とかの様子を見ながら次の食事を提供するタイミングを見たりとか、あとは、彼が何を食べたがっているのかなっていうのを見たり、目線で何を次は食べようとしてるのかなっていうのは、「100パーセント分かってますよ」っていうことではないんですけども、こういう次は食べたそうだなみたいな感じのを提供したりとか工夫しているかな。

一つの食材を口に入れてもぐもぐして、まだもぐもぐしているんだけど最初のもぐもぐの仕方と形が変わったりとか、もぐもぐの速さとかが変わってきたな<sup>48</sup>っていうときに、開いた口の中を確認して「これぐらいの量だったら次に進めても大丈夫かな」みたいな。<sup>49</sup> 全部を食べてから次のことを、本当はあげなきゃいけない<sup>50</sup>とは思っているんですけども、けんちゃんに関しては何て言えばいいかな。突然「うんぎゃあ」ってなっちゃうんです、けんちゃん。口の中が終わって、「もう終わっちゃったの、わあ」みたいな形で怒ってしまうときがあるんです。<sup>51</sup> そうなっちゃうと「あるよー。はいどうぞ」って言っても、べたっとなっちゃうって終わってしまうんです。なので、「終わりそうですか、あげちゃってもいいですか」みたいなそういう感じで。「お口の中、見ますよ」みたいなタイミングで、「はい次です」みたいな感じであげないとなかなか難しい<sup>52</sup>のかなって。私も今、探索中なんですけどね。

(けんちゃんなりの食べたいペースを) まだ私の中でつかめてないんです。だから、そんな感じで口の中の様子をうかがいながらやりますね。

このように、みどり先生はけんじの口の動かし方や形・速さの変化を丁寧に見ながら(下線48)、けんじが口を開いた瞬間に中を確認し、次に口に運ぶ一口量を判断していた(下線49)。また、けんじの特徴として、口の中が空になると突然怒って泣き出し(下線51)食べなくなることもあるため、けんじが口の中の食べ物を飲み込む様子を見ながら、口の前にスプーンを用意するタイミングを細やかに見計らっていた(下線52)。本来ならば、口の中のものを全部食べてから次をあげなくてはいけないということを理解しながらも(下線50)、けんじの発する思いを汲み取りながら、けんじにとって良いタイミングを模索している様子がうかがわれた。

なお、みどり先生は、けんじが膝の上で食事していたときと椅子に座らせたときの違い(下線53)について述べ、以下のように「肌と肌が触れている安心感」も関係しているのではないかと(下線54)と推測していた。

5月21日

だから、もうちょっと落ち着いて私もタイミングが分かってくれば、落ち着いてゆったりとした雰囲気の中で提供できるのではないかなと思うんですけど。お膝であげてるときは別に、そんなに焦って「いいですか」って感じではなかったんですけど、椅子に座らせてからおかしいなっていう感じなんですよね。<sup>53</sup> (中略) 何でしょう本当に。私もそこは疑問なんですけど。肌と肌が触れている安心感がなくなったことによって、<sup>54</sup> ちょっとした不安で「ぎゃあ」ってなっちゃうのか。

なお、6月下旬のインタビュー以降は、咀嚼や発達に関する難しさや配慮などが具体的に記述されたり語られたりすることはなかった。

#### ③ 食べ物への反応・食べることへの意欲

##### 【4月】食べ物に興味はあるが、怖くて触れない

9月のインタビューで食べることへの意欲が見られるようになったことが語られた中で、次のように、けんじの入園当初の様子を振り返る語りがあった。

9月9日

意欲、興味があっても手を出したいけれども、でもやっぱり怖くて出せないという時期があったんですね。<sup>54</sup>



そういうのを、4月、初めて入園して、多分うちではそういうの全然やったことはなかったと思うんですね。でも、興味はあるけど怖くて（手を）出せなかったけんちゃんが、少しずついろんなものに興味を出し、ズンズンっていう形で触り始めてから、握って、掴んでという形の流れがあった<sup>55</sup>ので（中略）。怖い不安な気持ちいっぱいあるけども、ぜひ意欲を表面に出してほしいなっていう気持ちがすごくありますね。

みどり先生によれば、けんじは入園当初、目の前に出された食べ物に対して興味は示すものの、怖がって手を出せないという状態であった（下線54）。生活全般におけるけんじの様子についても尋ねたところ、「どうしても不安で、保育者が抱っこすると、もうエプロンにギュッとしがみついて放さないとかってというのが結構あったりとかして。初めて見るものって、興味があって進んでいく子もいれば、不安になっちゃう子もいて、（中略）けんじは不安になっちゃう子だったので。」と語っていた。「①食事環境への反応」の5月の語りにも見られたように、けんじは新規のものに対して不安になる様子が見られていた。そうした姿から、みどり先生はけんじが食べ物に興味がないわけではないが、「やっぱり怖くて（手を）出せない」と理解していたと考えられる。

その後、けんじが徐々に色々なものに興味を示し、触り始めるようになって、握る・掴むという手指の発達が見られた（下線55）。身体的な発達だけでなく、けんじの環境等への敏感さもあいまって、食べ物への反応の仕方やかかわり方も変化したことが示唆される。

#### 【6月から7月頃】自分で食べたいという意思表示

アンケート調査では、毎月、けんじの自分で食べたいという気持ちを尊重するように、具体的にどのように食事の環境を整えているかを尋ねた。すると、6月下旬のアンケートで、「小皿に食材（手でにぎれる位の大きさ）をのせ、本児の前に出している」と回答していた。また、けんじの「口の中から出た食材を自分の手で再度入れ直そうと」する姿についても述べていた。このように、6月頃には、けんじは自分で食べるという思いを強く持っていたことがうかがわれる。

さらに、7月下旬のアンケートでも、けんじの自分で食べたいという気持ちを尊重して、「手を伸ばすので、手の届くところへ小皿を置き、その上に食材を置いて本児は手づかみできるよう配慮してい

る」ことや、けんじの「食材を手づかみで取ろうとする姿」を挙げており、そうしたけんじの様子の理解や支援を継続していた。

#### 【8月】自分で食べたいという意思表示

8月下旬のアンケートでは、みどり先生はけんじの食事に関する発達や成長がみられたときとして、「手づかみで食べられるようになった時。手でつかんだ食材が口に入った瞬間（口の場所がわかるようになったと感動した!）」と回答していた。9月上旬のインタビューでも、けんじは食べ物を「つまんで口に持っていく」ことができるようになっており、「少し前までは、手のひら全体を使って握るような形で持っていたものが、最近3本の指を使ってつまむようになってきた」と語っていた。

さらに、9月上旬のインタビューでは、けんじの様子について、みどり先生がスプーンで援助することを拒む姿が語られた（下線56）。

9月9日

自分でやろうとする気持ちがすごく芽生えて、私がスプーンで援助しようすると、おいってする。横向いて、違うみたいな感じで態度をとるようになります。<sup>56</sup> もう自分でやりたいんですね。

（中略）今、やってるのは、小皿に、手で持てそうな固形の食材を数個置く。その小皿をけんちゃんの前  
に持っていく。<sup>57</sup> そうするとけんじくんが手を出して、やっとな最近つまんで食べるように、つまんで口に持  
っていくようになりましたね。

けんじの横を向いて「おいってする」仕草から、けんじが自分で食べたいという意欲を持っているとみどり先生は捉えていた。そうしたけんじの思いを受け止めて、自分で食べることができるよう、手で持てそうな食べ物を小皿に置いてけんじの前に置くという方法を取っていた（下線57）。

8月下旬のアンケートでも、「小皿に入れる食材の量とそれをつかむ量、そしてそれが口に入る量を見て、次に小皿に入れる食材のタイミングをはかっている」と回答していた。食事援助のタイミングの判断に、けんじ自身の手づかみ食べが加わり、直接的に口に食べ物を運ぶ行為ではなく、この時期には小皿に食べ物を置くタイミングを判断していた。

以上のように、けんじは入園当初は食べ物への興味を示しつつも、怖さから食べ物に触れなかった時



期から、徐々につつく・触る・握る・摘むというように、食べ物へのかかわり方が変化していった。そして、自分で食べたいという意欲も表すようになっていった。みどり先生の支援の仕方、そうしたけんじの姿に応じて、細やかに変化していった。

#### 4) けんじとみどり先生の事例を通して

入園から9月までのけんじの食事の様子と、みどり先生の配慮や支援について検討してきた。その中でけんじの食事の心地よさを支える要因として、以下の3つが示唆された。

第一に、食事援助の大前提として、食事の環境がけんじの食事の心地よさに大きく影響していた。けんじは5月中旬頃まで椅子に座ることを拒否し、みどり先生の膝の上で食事をしていた。椅子へ切り替える際も、みどり先生は時間をかけて徐々に食事の環境にけんじ自身が慣れていくのを支えていた。けんじの食事の心地よさを支える要因として食事環境へ慣れるための時間をとり、試行錯誤しながら支えていくプロセスがあった。

第二に、けんじは調査期間を通して、よく咀嚼している様子が語られていたが、離乳食が移行する時期に食べ物の水分が減り、嚥下しにくくなる様子が見られた。そのため、みどり先生はむせたり、食べ物が詰まったりしないよう配慮していた。また、初期に膝の上で食事をしていたときには、けんじの口の様子が見にくかったことが挙げられていた一方、スプーンをけんじの口の前に用意するタイミングについては、椅子に座るようになってからみどり先生の中でうまくつかめない感覚が生まれたとも話していた。膝の上での食事援助と椅子での食事援助と、それぞれのしやすさとしにくさがあることが示唆された。

第三に、けんじの自分で食べたいという思いの表出に寄りそうみどり先生の姿があった。けんじは5月下旬頃まで、食べ物を触ることを怖がっていた。そのため、みどり先生は自分から食べられるようになる姿をゆったりと待っていた。けんじの成長、自分で食べようとする姿、思いの表出そのものを喜んでみどり先生の様子がうかがわれた。みどり先生が焦らずに見守っていたのは、先生自身の性格もあるかもしれないが、0歳児クラス担任が7回目、離乳期の子どもの食事に関する育ちの見通しを持っていたからではないだろうか。

## V. 総合考察

本研究では、2組の子どもと保育士の入園から約半年間の食事場面について、離乳食の変遷や子どもの食事の様子、子どもと保育士の食事での関係性の変容を質的に記述した。そして、0歳児クラスの食事場面での子どもの心地よさを保育士がどのように支えているかについてプロセスを描出した。

### 1. 食事場面での「子どもの心地よさ」の普遍性と個別性

2つの事例で共通していたのは、保育士は子どもが楽しく食事をする、自ら食べようとするのを大切にしながら、その時々の子どもの思いや姿を受け止め、その子によってより心地よい食事環境や食事中のかかわりを考え、対応していたことである。そのことを、のぞみ先生は、「無理に食事をあげるのとかではなくて、(中略) あけみちゃんの思いをくみ取って声かけしてかかわるように」と語り、みどり先生は、「けんちゃん自身の意思表示、表現で提供をやめたりとか、これからもしていけたらいいな」と語っていた。子どもの自主性の表れやペースは一人ひとり異なるものであり、食事場面での「子どもの心地よさ」を支える／脅かす要因も違うことが、本研究の事例からも示唆された。その個別具体的なありようと保育士の受け止めや対応のプロセスを描出できた。

### 2. 食事場面での「子どもの心地よさ」を支えるもの

子どもが表出する食事中の思いは、子どもによっても異なり、同じ子どもでもときどきで異なる。それらを受け止めながら、どのようにしてその子にとっての心地よい食事を支えられるかを試行錯誤しているということが、2組の事例から描出された。

特に、0歳児クラスの入園当初は、一人ひとりの子どもとの出会いがあり、保育所での暮らし全体を通して信頼関係を築きながら、食事の営みをその子とともにつくっていく時期である。どちらの事例でも、子どもの発達に伴い変化する食事の様子を受け止めながら、その子の思いを必ずしも十分に把握できない中で、想像することで補い、子どもの思いがけない反応に戸惑い、自分の対応を振り返り、また試し、反応を見て、子どもの成長変化に喜びや手応えを感じるということを繰り返していた。

その子の食事の「心地よさ」を支える要因（食事の段階や内容の変容、食事環境や時間の配慮、タイミングやペースの配慮など）は、そうしたプロセス

の中で考えられ、試され、見出されていくということが示された。

### 3. 本研究の意義

本研究では、従来の子どもの身体的発達と食行為の変化に関する検討や、子どもと保育士の相互交渉や援助行為に関する検討では明らかにすることのできなかった、子どもや保育士の心の内面も考慮した食事場面における子どもの姿や子どもと保育士の関係性の変容を捉えることができた。また、2019年度の研究と比べてより具体的に、食事の営みを時間の経過のなかでともに紡ぎ出す存在としての子どもと保育士のありようを示すことができ、より実践的な示唆を得られたと考える。

### 4. 今後の課題

本研究では、2組の子どもと保育士の入園当初から約半年間の事例を質的に検討した。個別具体の知見を得られたが、さらに多くの事例を通して検討する必要がある。

また、子どもと保育士の食事のプロセスを支えていたと考えられる他の要素（同僚性や連携など）については検討できていない。0歳児クラスの食事場面は、クラス内の同僚との連携や、園内の保育士と調理担当者の連携、主任等の支援がなければ成り立たないものである。今後、さらに同僚性や連携、園の組織体制、そしてそれらを支える園の理念や歴史の変遷にも着目し検討したい。

## VI. おわりに

園の食事場面は、調理従事者を含めた多くの保育者の食への価値観が影響を及ぼしている。「子どもにとって良かれ」と思った、子どもへの援助や食事等の環境構成が、毎日繰り返される。

ロゴフ（2006）は『文化的営みとしての発達—個人、世代、コミュニティ』という著書の中で、「人は文化の活動に参加し関わりながら発達するのであり、文化の活動も世代を越えた人々の関与によって発達的に変化するものです。各世代の人々は、他者とともに社会文化的営みにかかわる過程で、前の世代から受け継いだ文化的道具や実践を活用し、拡張します。人々は、文化的道具の共同使用や実践を通して発達しつつ、同時に文化的道具、実践、制度の変容に手を加えることになるのです。」と記す。一人ひとりの子どもが園での食事と家庭での食事を行き来する中で、「心地よい食とは何か」「理想の食事

像」を築いていくことであろう。

本研究は、0歳児の子どもと保育士の関係性における発達的な変化に注目してきた。より長期的な発達のプロセスが解明できれば、子どもの食事行為の発達的な変化と共に、「なぜ」「どうして」といった子どもの疑問や気づき、それを支える環境のあり方も、今後、探求していきたい。きつこうした子どもとのやりとりが、保育者の「食を営む力」を育て、当たり前のように当たり前じゃない、先人が築いてきた我が国の食事観や食文化の魅力を再発見させてくれる場になる。食事場面での子どもとの関係性構築のプロセスの一つ一つが、次の世代のわが国の食文化を創造していくのであろう。食事の場面でも子どもに学ぶ保育実践のために、引き続き、援助や環境構成のあり方を探求していきたい。

### 注

- 1) B園では、椅子に座って食事をする時期について、玩具を見つけて移動する手段（ずりばいやハイハイ）、玩具で遊んでいる時や床に座っている時の姿勢（背筋がしっかり伸びているか）、安定感（すぐ前後左右に転がってしまわないか）、抱っこしたときに腰や足が安定しているかを見て、椅子に座らせている。

### 引用文献

バーバラ・ロゴフ著 當眞千賀子訳 2006 文化的営みとしての発達—個人、世代、コミュニティ 新曜社。  
淀川裕美・酒井治子・林薫・志賀口大輔・渡邊高幸・會退友美・池谷真梨子・伊藤優 2019 低年齢児の食事場面での保育者の援助と環境構成に関する研究, 保育科学研究, 10, 46-66.

### 謝辞

本研究にご協力くださいました園児の皆様、職員の皆様に心より感謝申し上げます。調査協力をご快諾くださいました保護者の皆様にも厚く御礼申し上げます。また、本研究を助成していただきました日本保育協会保育科学研究所に深く感謝申し上げます。

### 付記

本論文は、研究チーム全員で計画・実施・分析した調査データについて、ⅠとⅥを酒井、ⅡとⅤを淀川、Ⅲを淀川・林・志賀口・渡邊・會退・池谷・伊藤、ⅣのⅠを伊藤・會退、Ⅱを淀川・池谷が分担執筆し、全体の推敲を全員で行なったものである。